巻頭言

夕張発：希望への学び

北海道大学大学院教育学研究院教授　宮崎 隆志

夕張市が危機的状況にあることはもはや言うまでもない。しかし、それは財政やそれに制約された行政システムの危機であり、地域の住民までもが絶望し疲弊している訳ではない。「夕張再生」が語られるのも、地域に暮らす人々が持つエネルギーの可能性を確信するからであろう。それに依拠すれば、あるいは依拠することによってのみ、地域は再び活性化することができる。そんな確信が「ゆうばり再生市民会議」のメンバーをはじめとする地域の人々にはある。

しかし、可能性は何らかの条件がないと現実のものにならない。まちの繁栄とともに築かれたかつての行財政システムは、残念ながらもはやその「条件」としては期待できない。なぜなら、これから進むべき方向は、かつての行政依存型のそれとは異なるからである。そしておそらく、どこかに見本がある訳でもない。したがって、地域に秘められた可能性を現実的な力にするためには、進むべき方向性と新たな条件を創り出すことが必要であろう。

今回の事業（財政破綻の自治体における介護福祉再生方策に関する調査・研究事業）は、そのような問題意識に基づいて取り組まれた。ワーカーズコープは、住民が主体となった地域づくりのコーディネーターとしての実績を各地で積み重ねてきている。その取組みの特徴は、「ピンチをチャンスに変える」働きかけにある。例えば、ある施設では利用者どうしの利用マナーをめぐるトラブルがあり、公共施設の運営をめぐって深刻な事態が生じていたが、管理を担うワーカーズコープは利用者懇談会を開催し、相互の立場や地域全体という視点に立って問題を捉え直すことを促した。

夕張での今回の事業にあたっても、そうした発想が基本にある。漠然とわかったつもりになっていた地域の事柄を、あらためて見つめ直すためには、実際に何が起きているのかを調べる調査活動が不可欠であった。調査の過程を通して、地域懇談会のように数多くの対話が繰り返された。また、調査結果はシンポジウムとして公表され、日頃の生活を新たな視点から振り返る機会になった。

そして、シンポジウムの討議は、「ピンチ」が実は「財産」であることを浮き彫りにした。例えば、福祉や医療の専門機関を住民の生活の中に埋め戻し、住民の協同的な問題解決能力の向上に資する機関にする必要があることが指摘されたが、これは、私たち一人ひとりの「生きる」という主体的な営みから遊離してしまった近代の専門知を批判的に問い返すという現代の大問題と直結している。「生きていることが迷惑をかけることになる」という高齢者の悩みをどのように受け止めればよいのかも話し合われた。これは、自己責任イデオロギーの下で排除された日本や世界の多くの人々に共通する声である。「声なき声」になりがちなその声を真正面から受け止め、地域で何ができるのかの模索が始まっている。

つまり、夕張の挑戦は、現代社会が逢着した諸困難に対する解答の実践的な模索と言ってよい。糸賀一雄にならえば、「夕張に世の光を」ではなく「夕張を世の光に」とでも言えようか。世の中の人々の期待が集まるだけの「財産」を夕張は持っている。

ただし、その「財産」は、「ピンチ」の中にある住民が、自らあるいは集団的にそれに向き合い、危機を課題に転換するような学びのプロセスを組織しなければ、「持ち腐れ」に終わってしまいかねない。その学びのあり方については、シンポジウムのまとめの発言の中で向谷地氏が指摘されているように、浦河べてるの家の経験が示唆的である。それを手がかりにしながら、今回の調査やシンポジウムのような取組みも包摂した夕張らしい新しい学びのスタイルが創出されることを期待したい。

以上のような取組みを通して、地域づくりの方向性とその条件が見出されつつある。もちろん、その方向性は依然として漠然としたものであり、具体化するには更なる努力を要する。しかし、それは努力という言葉が持つ「苦しさに耐える」というイメージとは異なり、むしろ悩みを分かち合い、自分たちでその根源を調べ、どうしたらよいのかを考えるという、希望を見出す過程といったほうがよい。

人間らしく生きるための不可欠の要件の一つは希望を持つことであるが、その探究を地域の実際の生活の中で積み重ねることができれば、夕張での暮らしが充実したものになることは間違いない。住民が希望を共に見つけ出す、そのような取り組みを支援できる行政がそこに登場すれば、住民の可能性を現実化する条件は確固たるものになる。

そして夕張の希望は、日本のみならず世界中で生きる上での困難に直面している人々の希望にも連なる。夕張の地域づくりは、こうした連帯の上に展開するであろう。

現代の限界線上に立ち、半歩先にある未来を探る営みが、ここから始まる。